

第1回で読んだニューギニア高地人の例でも分かるように、人類の歴史上また地球上の何処でも、常に男性が一番、女性が二番扱いだった。この序列を差別というのであれば、人類の歴史はつねに男女差別の歴史だったし、男性が加害者で女性は被害者だった。しかし、その原因を家父長制だと言うなら、それは結果であって原因ではない。

男女差別の原因は、アリス・ベーコンも言うように「力の差=腕力の多寡」p93 だったと思う。班田収授法の口分田貸与の基準は、腕力比に従って男1に対して女2/3だった。租庸調の祖は口分田の広さに応じて徴収された。多くの女性論者たちは、男女差別の原因を「腕力の多寡」にもとめると、肉体は変わらなそうなので男女差別は永遠に解消されなくなることを恐れて、「腕力の多寡」を原因とすることに拒否反応を示している。

性別と性差を分ける考え方はとても斬新で、性差は社会的に作られたという説は説得的だった。しかし、ジュデウス・バトラーのように生物的な性別も、文化的・政治的なものだというと(バトラーの日本語は難しくて、誤解しているかも知れないが)、言説の寄って立つ基礎が現実から離れてしまうのではないか。言説の正しさを担保するものが無形の観念だけだとすると、言説の正しさを最終的に決めるのは多数決になるだろう。歴史上常に、また地球上のどこでも男女差別があったと言うとき、差別の根拠を無形の観念に求めるのは無理で、差別を支える事実があったはずだ。でなければ、こんなに長くかつ広い地域で男女差別が残るわけがない。

アリス・ベーコンは「アメリカでは、一般に召使いと主人の関係は、お互いに一定の義務を負う商業的な契約にすぎない。両者のあいだにとりたてて感情的なものはないし、ましてや愛情などあるわけもない」p235 と言っているが、これは彼女の生きた社会がすでに近代となっていたからで、ジャック・ラーキン「アメリカがまだ貧しかったころ：1790-1840」で、一緒に住んで同じ仕事に従事してその家を支える者は、たとえ血縁がなくても、全員を家族と見なしていたという。前近代の日本と変わらない。

速水融が江戸時代も家族の構成員数は5~7人だったというのをうけて、江戸時代も核家族だったという女性論者がいるが、江戸時代の核家族と戦後の核家族は質的に違うものだ。農業しかなかった時代の家族は、たとえ親子だけの核家族があったとしても、望まれたのは人数の多い大家族だった。しかも西日本と関東以北では家族構成が違った。それは、イザベラ・バードが「日本では、戸数から人口を推定するには、戸数を5倍するのがふつうである。ところが私は、好奇心から、沼の部落を歩きまわり、すべての日本の家屋の入口にかけてある名札を伊藤に訳させた。そして、家に住む人の名前と数、性別を調べたところが、24軒の家に307人も住んでいたのである。ある家には4家族も同居していた」P205 という言うのでも分かるだろう。

津田梅子の協力があつたとはいえ、アリス・ベーコンは日本社会を実に良く観察してい

る。下記のベーコンの言葉は感動的である。

「上流階級と庶民では、妻と夫との関係が明らかに異なっている。商人や貧しい農民の妻は、天皇陛下の妻よりも、はるかに夫の地位に近い。明らかに身分がひとつ上がるたび、男性は同じ階級の女性よりも少しずつ偉くなるようだ。農夫とその妻はふたり肩を並べて畑仕事に励み、同じ荷物を運び、食事は同じ部屋で一緒にとる。家庭を支配するのは、性別の如何にかかわらず、気性の強い方である。(波線は報告者)(中略)

田舎の女性は、厳しい労働を強いられ、老けるのも早い。都市の女性より自由で独立している。農民の妻は、市場へ作物を運ぶなどの肉体労働をしなければならないが、ある意味では貴族の女性より大切にされていて、幸せである。高貴な女性は、美しい庭つきの大きなお屋敷に隔離され、女官と一生を過ごさなければならない。夫は暇なときだけ、玩具を扱うかのようにしか相手にしてくれない。けっして夫が妻と同等であることはないし、自分の関心事や、気持ちを打ち明けてくれることもない」 p92～4

「日本の女性のなかで一番自由で自立しているのは間違いなく平民の女性である。日本中どこでも、ほとんど働きづめで、贅沢とは縁のない生活をしているが、その仕事ぶりからは、自立心や知性が感じられる。アメリカ人女性と同じように、家庭ではとても尊敬され、大切にされている。上流階級の女性と比べて、生活は充実していて、幸せそうである。家計に大きく貢献しているから、家族も彼女たちの言うことに耳を傾けるし、一目おいてくれる。」 p207

男女の腕力差は今でも変わらないし、肉体の構造が変わらない限り、今後も変わらないだろう。男女差別の原因は腕力差だったとして、女性が台頭してきた原因は何か。それは社会の価値観が、情報社会化により肉体優位から頭脳優位にかわって、肉体的な腕力の価値が無化＝劣位化されたからだ。その結果、女性は肉体的には非力なままで、男性と並びうるようになったのだと考える。

残された問題は、女性にしかできない妊娠・出産である。女性の職業労働に対して男性と同じ評価基準を適用するのは当然だが、妊娠・出産による職業中断を抱えたまま、女性に男性並みを要求することは過酷に過ぎる。

ニューギニア高地人がそうだったように、かつては男が戦い、女は決して戦わず一目散に逃げる決まりだった。女を逃がさないで死なせてしまうと子供を産む者がいなくなり、小さな集落全体が絶滅することを知っていたからだ。医療が未発達だった時代、些細な病気や怪我でも死に至ったので、彼(女)等の集落はしばしば絶滅している。

種付け男は1人いれば良いが、子供を産む女は何人もいなければ集落は絶えてしまう、と彼(女)等は知っていたのだろう。だから、女を戦いから、また見知らぬ男から遠ざけたのだろう。蓄えることができない社会では、男の老後保障として子供は絶対的に不可欠だったので、子供を産む女の重要性は大きかったのだ。 たくみ